

氷釈の章

尾池和夫選

2025年月号

霞袂集

かすかなる音にうすらひ揺らぎけり
斎場の一夜に積もる春の雪
杉山に杉の香籠る二月かな
船を待つ驪場の台車春寒し
乙巳の縁起物選る達磨市
行く先は西湖の畔柳絮とぶ

尾池葉子
大島幸男
長野眞久
余米重則
伊藤武敏
四宮陽一

美しとおもふ凶器や軒氷柱

氷凌集
羽鳥正子

初午の御下がりの鯛みづみづし

城島千鶴

梅月夜天神さんの帰り道

重富國宏

小さき影とらへきれずや木の根明く

益子桂子

古枝の余力ありけり茨の芽

渋谷啓子

老ゆること亦よきかなと花を待つ

服部喜美子

氷釈の章

尾池和夫選

2025年4月号

霞袂集

寒晴や京を南へ出で来れば
托鉢の笠深くする虎落笛
冬の霧大和も端の生駒谷
みづうみのあるが誇りや初景色
松過の神鶏かくもよく鳴けり
いつの間に群はづれしや白兔

尾池葉子
大島幸男
長野眞久
原稔
古川邑秋
大口彰子

大寒や工場の吐く水蒸気

氷凌集
佐藤美智子

歳徳棚正して拝む三世代

城島千鶴

一隅を照らす灯のゆれ初比叡

竹中教子

麻痺の手に手仕事遠し毛糸玉

遠藤長代

一頻りにぎはふ地鳴き日脚伸ぶ

羽鳥正子

待合すスイツチバック山眠る

川内一浩

氷釈の章

尾池和夫選

2024年3月号

霞袂集

闇へ朝しんと押す霜のこゑ
休みつつ歩む杖なり冬木の芽

尾池葉子
大島幸男

髭すこし伸びたる心地焚火果つ
鯛焼の生きてをるぞと持ち帰る
風呂吹や古びし椀の輪島塗
うたた寝の母やはらかし枇杷の花

長野眞久
原 稔
余米重則
大口彰子

咳き込めば母のいたはり襖越し
風神の袋の破れ空つ風
角刈りの生垣朝の霜の艶
干菜吊る上州の風いだきて
糖度計のぴびとよき音冬りんご
冬鷺の蓑毛乱れてゐたりけり

氷凌集
重富國宏
遠藤長代
佐藤美智子
益子桂子
真下章子
城島千鶴

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

2024年2月号

水を出て石を動かず穴惑
刈株のしひなに風の冬めきぬ
百三十七億年後の花八つ手
初霜や僅かに膨れローム層
日没の光の名残石路の花
冬空へクレール迫る造船所

尾池葉子
大島幸男
長野眞久
余米重則
四宮陽一
大口彰子

山裾の日を拾ふごとと冬わらび
外つ国を右隻の流転金屏風
石けりの石の飛びすぎ石路の花
柚子は黄に水尾の里の御陵道
明日伐ると決めてしみじみ散紅葉
岳はまだ岩に日のある夕紅葉

氷凌集
西村みゑ子
羽鳥正子
佐藤美智子
重富國宏
渋谷啓子
遠藤長代

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

2024年1月号

らしからぬ粒立つ雨に火恋し
秋深しジビエの店に鹿の角
忌を修すところに白き秋の薔薇
落人の村は湖底に水澄めり
金木屋鯖街道ははや闇に

尾池葉子
大島幸男
長野眞久
原 稔
四宮陽一

蓑虫のどれも短く風叩き

大口彰子

割るるまで鴉が落す鬼胡桃

氷凌集
渋谷啓子

引算に指貸してやる秋麗ら

羽鳥正子

氷河湖の藍の深まり鳥渡る

鴻坂佳子

空う元氣出してもひとり夜食摂る

川内一浩

秋蝶に花々小さくなつて来て

佐藤美智子

新聞をきちんと畳み星月夜

服部喜美子